京都市立川岡東小学校

令和５年度　学校経営方針

◆京都市の学校教育目標

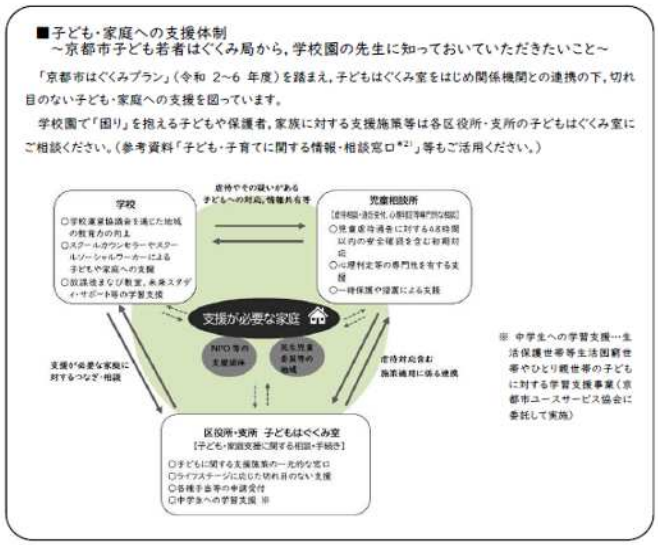
『伝統と文化を受け継ぎ　次代と自らの未来を創造する子ども』

◆目指す子ども像　３つの姿

１．広い視野と豊かな感性を持ち、よりよい人生や社会を創造できる。
２．様々な学びを生かし、社会的・職業的自立を果たすことができる。
３．多様な他者と共に生き、学び合い、人権文化の担い手となることができる。

◆全教職員で進める学校園づくり　５つの柱

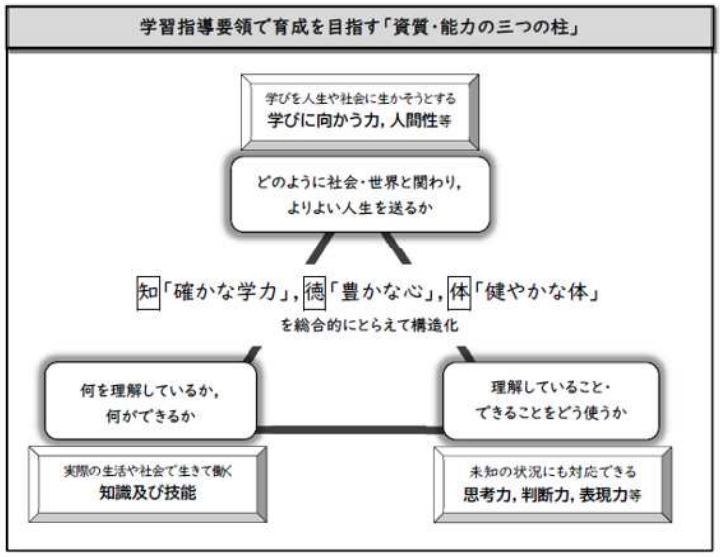
１．『いのち』～子どもの命を守りきる～
２．『よりそい』～多様な子どもを誰一人取り残さない教育を進める～
３．『つとめ』～教職員の職責を自覚し、研鑽することで、教育の質を高める～
４．『ひろがり』
　～カリキュラム･マネジメントの視点をもって社会に開かれた教育課程を実現する～
５．『つながり』～校種間連携・接続により子どもを支える～



◆「生きる力」を育む１５の取組

1　社会とのつながり・接続を実感できる授業への改善
2　基礎的・基本的な知識・技能の習得と言語活動の充実
3　探究活動を通した、主体的・対話的で深い学びの実現
4　グローバル化時代に対応する実践的英語力の育成
5　ＬＤ等支援の必要な子どもの学力向上
6　道徳教育の充実
7　伝統文化や芸術を通じ、豊かな感性・情操を育む教育の充実
8　規範意識の育成
9　多様性を理解する姿勢の涵養
10　支え合い高め合う集団づくりの推進と絆づくり

11 運動やスポーツの実践と体力の向上
12 保健教育の充実
13 飲酒・喫煙・薬物に関する指導
14 安全教育の充実
15 食に関する指導の推進



◆学校教育において重視する視点

●子どもの「主体性」と「社会性」の育成を目指し、「自ら学ぶ力」と「自ら律する力」を学校・幼稚園全体の教育活動の中で高める。

・小・中学校期における「自ら学ぶ力」
学ぶことに興味や関心を持ち、進路や将来の生き方と関連付けながら目標実現への見通しをもって粘り強く取り組むとともに、自己の学習活動を振り返り、自らの学びをよりよい方向に調整し、他者とも協働できる力
・小・中学校期における「自ら律する力」
地域・社会との関わりの中で、他者への思いやりや寛容、人と人との絆の大切さを実感し他者と協調しつつ、自らの生活や人生、地域・社会をよりよくするために、時と場に応じた正しい判断と行動ができる力

〈小・中・小中学校（義務教育学校)〉
1． 主体的・対話的で深い学びを重視した授業を通して、学びの質を高める
2． 日々の授業と家庭学習との連動を通して、自学自習の習慣化を図る
3． 自他を大切にし、「公共の精神」に基づく態度を育む

桂川中学ブロック 経営方針

○小中一貫　学校教育目標

互いの生き方・考え方を尊重し合える関係を築き、自己の可能性を信じ、進もうとする児童生徒の育成

○小中一貫　育みたい資質・能力

■　つながる力
　　他者との関係を柔軟に築くことができる力

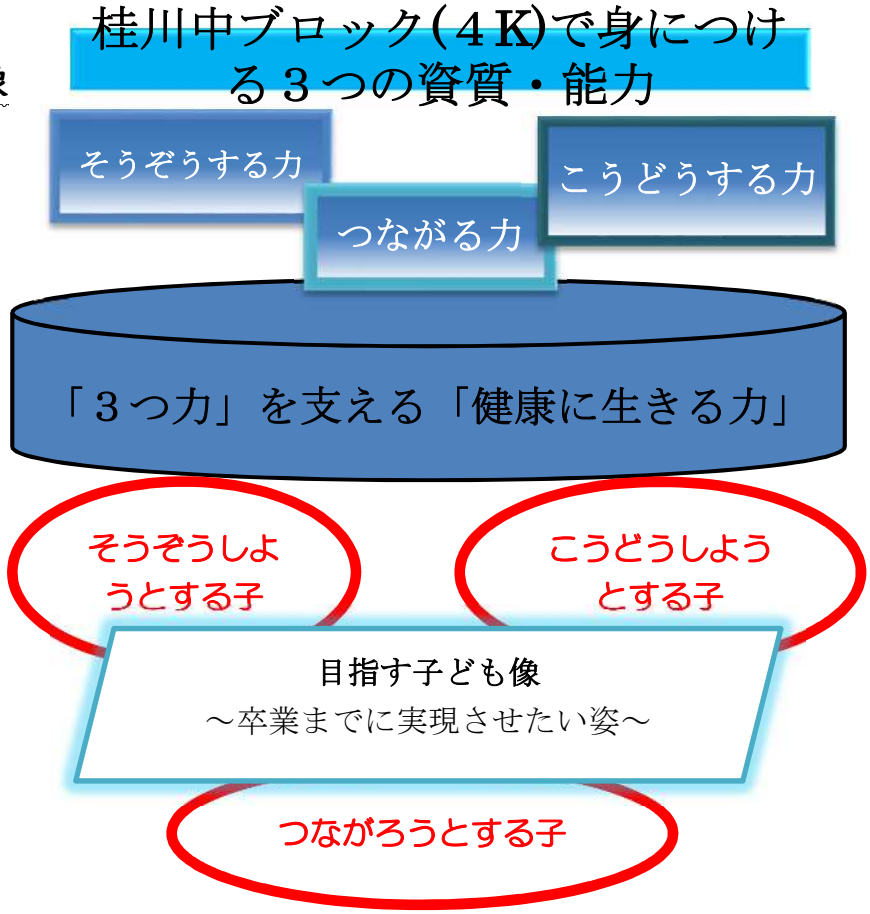
■　そうぞうする力
　　相手の気持ちや未来の自分の姿を想像する力
　　新しいことを生み出し、社会や人生を豊かにする創造力

■　こうどうする力
　　自らの判断もと、自ら動き出せる力

※これらの３つの力を支える土台は「健康の生きる力」である

○小中一貫　めざす子ども像

・つながろうとする子
・そうぞうしようとする子
・こうどうしようとする子



○京都市立川岡東小学校　学校教育目標

『仲間とともによりよい社会を創り出す子ども』
～自ら学ぶ力を高め、豊かな人間性を育み、心身の健康を保ちながら～

○基本方針

新型コロナウイルスで大きな混乱をまねいた３年間。その中でも、学びをとめない、という姿勢で、様々な工夫をしながら取り組みをすすめてきた。大きく進展したのが、一人１台端末の GIGA スクール構想である。大きく前倒しをする中で学習の中に、タブレットの活用が一気に導入され、指導する側が大きく戸惑うことなったが、今では、ある一定の定着が図られ、若干の格差はあるものの、教具として積極的に活用している状況である。また、この３年間の中で、リモートでの取り組みも当たり前のように活用されるようになり、異学年間の交流だけでなく、他の地域との連携や交流、他機関との連携も行えるようになった。時には、家庭と学校とつなぐこともでき、多様な学び方につながっていった。厳しく窮屈な３年間ではあったが、その中でも、新たな教育方法や支援の仕方などを得ることにつながり、我々の視野も広がることとなった。

コロナ禍という３年間を想像することができたものはいなかったであろう。今の社会の先行きの不透明さや変動性を象徴したような機会となった。

これからの社会は、VUCA の時代といわれている。変動があり、不確実で、複雑な上に、曖昧な社会である。以前より、AI やロボティクス、IOT やデジタル化などの益々の発展により、大きくしかも急速に変化していく。その上、環境の変化による経験のない自然災害なども発生する可能性もある。まさに、不安定で、不確実で、複雑で、曖昧な社会の変化に対応していかなければならない。そして、情報機器の発展により、グローバルに様々な出来事が展開され、広い地域に大きな影響がでてくる。今回のコロナに関わっても、一部の地域の問題ではなく、全世界に影響し、大きな社会問題となった。

子ども達は、このような社会の中を生きていくこととなる。そして、このような社会の中で、その社会を構成していく一人となっていかなければならない。そのための生きる力の土台となるところを、義務教育の期間で育まなければならない。VUCA の時代の中で、豊かによりよく生きていくためには、私たちが受けてきた教育では対応しきれないということを、まず、私たちが確認しておかなければならない。知識偏重の教育ではなく、主体的に考え、グローバルにつながりあい、自分を取り巻く社会をよりよく創造できる一人として生きていく力が求められている。

われわれ教師は、「先生」と呼ばれ、その自覚と責任を持って子どもたちとの生活を営んでいるが、その「先生」という意味をしっかりと自覚でできているだろうか。

「先生とは、先に生まれたから先生ではない。先を生きているから先生なのだ」と言われた校長先生がいた。私は、「先生とは、先を生きている、先を見通して今を生きているから、先生なのだ」と考える。これから先の社会を見通して、これから先の社会を創造し、これから先の社会に生きる子どもたちに、よりよい生き方につながる力をつけていくの

が、我々の役割であり、そのことが、よりよく社会につながり、よりよい社会の発展につながっていくものだと考える。

その自覚と責任を、私たちはしっかりと持って、子ども達の前にたたなければ、「先生」という責任は果たせないのではないかと考える。そして、一人一人に多様な幸せ（Well-Being）の実現をめざしていかなければならない。

また「親ガチャ」という言葉が今、子どもたちの中でも広がっている。子どもは生まれる場所や環境を選ぶことができない。しかし、その生まれたところで将来が決定されるという考えである。これは、差別の再生産や格差の再生産を意味していると考える。公教育では、この考えからの脱却をしていなかければ、公教育に携わっているものの自覚を問われると考える。公立の学校であるからこそ、子どもの地域や家庭の環境に左右されない、その脱却を図れる学校教育を進めていくことが大切であり、その責任を持たなければならない。簡単にいえば、公教育に関わるものが、子どもの力を、家庭や地域のせいにしてはならないということだととらえる。

そこで，わたしたちは，教育公務員としての職責を自覚し，学校に関わるすべての人と，共に生き，共に学び合える環境を大切にし，主体的に参加し，自らの環境（人や自然）をよりよくしていこうとする資質の向上をめざし、社会を構成する一人としての自覚を高め，仲間とのつながりを大切にしながら，これからの社会を創造し，人権文化の担い手として社会貢献できる人材の育成を進めていかなければならない。そして，今日，国際社会が連携して 2030 年までの達成を目指す共通の目標である「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」の精神である，誰一人取り残さない教育の実現を実践し，先送りしない教育をめざしていきたい。

そのためには、考えるための知識を与えることが大切ではあるが、その知識をしっかりと活用できる力も同時に育てなければならない。また、学び方を学ばせるともに、自ら学びとる力も育まなければならない。そのことを、共通理解した上で、川岡東の子どもたちの姿をとらえ、川岡東の教育を教職員の連携の中で進めていかなければならない。

本校の児童の実態をとらえ時，仲の良い友達との生活を楽しみ，元気よく明るく活動できる姿がある。また，与えられた状況の中で，その状況を受け入れ活動できる姿がある。しかし，自分の環境に対して、疑問を感じず不条理を考えずに，楽しんでしまうところがある。環境に大きく影響をされ過ごしてしまうところがあり、もっとよりよくしていくために，現状を鑑み，深く思考し，仲間と語り合い，工夫を重ね，充実させていくことに弱さがある。また，仲の良い仲間との生活を楽しむことはできても，共に生活をする存在を仲間として受け入れ，深くつながることができているわけではない。同じ社会で生きる存在を仲間として受け入れ，共に社会を創り出す仲間として，より深くつながり，積極的な交流を通して，歩みだす力の育成が必要であると考える。その上，一部の子どもには，自分の思い通りにいかないと，まだまだ強い力で意を通そうとする傾向がみられる。攻撃性

があり，周りの仲間に威圧的に接する傾向がある。言葉の使い方や幅広い視野につながる知識をもとに，より良く深く考え，共に歩もうとするコミュニケーション力の育成は，本校に与えられている課題と考える。

そこで、学校教育目標を『仲間とともによりよい社会を創り出す子ども』と設定した。そして、そのためには、自ら学ぶ力を高めること、豊かな人間性を育むこと、心身の健康を保てるように生活することが必要であると考え、副題に設定して、学校運営を行っていく。よりよい社会を創り出すためには,「よりよい社会とは何か」といった目標を共通理解し，そのために、そこで生活をする仲間とよりよく関わり合いながら，考え，話し合い，行動できる力の必要性を知り、そして，主体的に生きる，自律的に生きることが求められることを自覚できるように教育活動を進めて行かなければならないと考える。

そこで、副題の３つの視点を以下のように共通理解しておく。

・自ら学ぶ力・・・よりよい社会を創り出すためには、考える力の育成が重要である。学ぶことを通して、まず考えるための知識を蓄積し、蓄えた知識を活用し、よりよく思考できる力を高める。

・豊かな人間性・・・社会を創り出すためには一人の力では創造することは難しい。人とつながることができて、社会の構築につながる。そのために、人と豊かに交わることができる人間性を高める。

・心身の健康・・・よりよく生きるためには、心も体も健康でなければならない。よりよい生活習慣を構築できるように自らの命や体を大切できる心情を育み、実践できる自立心を養う。

の３つの視点を育むことを通して，これからの社会の中で，主体的に自律的によりよく生きることがきる子どもを育み，いずれよりよく社会で活躍する人間に高めていきたいと考える。そして，自ら生活をしている地域をよりよく創ることができる人として，社会に貢献できる人として，はばたいてくれることを願い，令和５年度の教育活動を推進する。

○めざす子ども像

すべての教育活動を通じて、人としての礎を築き、学力の基礎・基本の定着を図り、子どもの個性と可能性を引き出し、社会の中でよりよく生き抜く力を育成する。

① すすんで学習にとりくむ子
② 思いやりのあるやさしい子
③ 心も体もたくましい子

令和５年度重点目標

◎いつでもどの場面でも自分からあいさつができ、
常にはきものがそろえられる子ども
◎仲間との交流を楽しみ、しっかり聞き取り
しっかり話しきれる子ども

○めざす教職員像

（子どもに背中を見せることができる教職員集団）

学校教育目標の具現化に向けて、職責を自覚し、自己研鑽に努め、教職員との連携を深めながら、粘り強く実践できる教職員集団をめざす

・子どものことで汗がかける教職員集団
・子どもの将来を考え、熱く語り合える教職員集団
　→子どもの実態をさぐり、寄り添い、考える
　→真摯に学力向上に取り組む

★教職員研修の充実に向けて

・目の前の子どもの実態をとらえよりよく育むために、各主任のおもいをもとに企画運営力を高める。
・各校内研修において、感想や意見など主体的な発言による参加を基本とする。
・ＯＪＴによる若年研修会を充実させる。
・総合教育センターの講座等に主体的に参加する。※
※参加して自身が得たことは、「場（全体 or 学年部 or 学年）」を設けて校内へ返していく。

○めざす学校像

よりよく子どもを育むことを第１に考え、地域の特性を踏まえ、地域の中で、地域とともに歩むことができる学校づくりをめざす。

○子どもにとって、学びが楽しい、学び合いが楽しいと思える学校
○保護者や地域に存在感のある学校
○信頼を高め、地域に誇れる学校
○保護者・地域・保育園（幼稚園）・中学校等関係機関と連携・協働する学校
○校内の美化に努め、教育環境を整え、学びやすい学校

『前進発展』の精神で
ちゃんとやりきる川岡東

○学校教育目標の具現化にむけて★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

１「確かな学力」の育成に向けて

自分の良さに気づき、豊かに人と関わる子を目指し、国語科や道徳科を通して、言葉を大切にし、自分の思いや考えを豊かに交流できる子どもの育成を推進する

つけていきたい資質能力

自己実現力　　協働力　　自己表現力

① 学級経営力の向上・・・互いに信頼し、安心して過ごせる環境

○人権を大切にした一人一人の居場所がある学級経営を行う。
○「明日も学校に行きたい」と登校を待ち望むことができるような学級・学年づくりを進める。
○学習規律の確立、教職員の「待つ」姿勢と児童の「聞く態度」「相手意識」を育てる。
○授業改善、授業力向上のための教材研究の工夫と見直しを進める。
○京都市独自の教育課程指導計画に基づく指導を徹底し、指導と評価の一体化に努める。

② 授業力の向上・・・普通授業の充実の推進

○毎時間の授業を大切にする。
○各学年で指導すべき基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、すべての子どもに学習基盤の確立を図る。
○主体的・対話的で深い学びを重視した授業を通して、学びの質を高める。
○各教科・領域の学習において、問題解決的な学習や探究活動を充実させるとともに習得した知識・技能を活用し、言語活動（話す・読む・聞く・書く）を重視した授業の展開を工夫する。
○指導方法の工夫（一人まなび、二人まなび、グループ学び、集団学びなど）、指導体制の工夫（Ｔ・Ｔや習熟度別指導等）により、「わかる・できる喜びと学ぶ楽しさ」を実感できるように個に応じ

た指導を充実させる。

○授業の流れがわかる（めあて・目標→まとめ・ふりかえり）板書とノート指導を充実させる。

○カリキュラムマネジメントを意識しながら、ICT 機器等を積極的かつ効果的に活用した学習活動を充実させる。(GIGA スクール構想の充実)

○英語を用いて積極的にコミュニケーションを図れるよう英語教育を充実させる。

○１時間（４５分）を大切にするとともに児童が主体的に学習に取り組む授業を実践する。

○校内研究の充実を図るとともに、研究の成果を発表し、広く意見や感想をいただき本校の研究活動の充実に努める

○学年間の連携および低中高学年部会の連携を充実させる。

③ 学力向上・学力定着への取り組み・・・学びへの意欲につながる基礎学力の定着

○学力向上推進チームを効果的に機能させ、教職員全員で学力向上をめざす。

○「全国学力・学習状況調査」、「京都市学習支援プログラム（ジョイントプログラムやプレジョイントプログラム)」、「京都市学力定着調査」の結果分析から実態を正しく把握、共通理解をして授業改善を図る。

○帯時間の活用（系統的な取り組み）により基礎的・基本的な学力の確実な定着を図る。

○授業内容と家庭学習の連動を強化し、家庭学習の充実を図るとともに、自学自習の習慣化を図る。

○学び方を学ぶ機会を充実させるとととともに、時には家庭学習の仕方など提示することで、効果的な家庭学習を提案し、家庭学習の習慣化と共に家庭学習が充実できるように働きかける。(家庭学習のススメをもとに、一貫した取組)

④ 総合育成支援教育の充実・・・個々の実態にあって指導内容の工夫

○個別の指導計画を立案し、個の課題に応じた教育を充実させる。

○管理職およ総合育成支援教育部を中心とした校内体制で、個の課題に応じた支援を充実させる。

○ＬＤ等通級指導担当者、総合育成支援員等との情報共有と連携を密にし、学力向上の取り組みを推進する。

○各関係機関と連携を積極的に行い、子どもの実態を明確に分析し、適切な支援を行えるようにする。

２「豊かな心」の育成に向けて

自他の命、生き方、考え方を大切にする心情と規範意識の育成

①人権尊重を基盤とし、つながりを深め、互いに高め合う集団づくりの推進

○すべての児童が、学級や学年の中に自分の居場所を実感できるように、存在感や成就感・達成感を感じ、相手のよさを認め、互いに指摘し合える学級・学年の風土を創りあげるとともに子ども同士のつながりを積極的に支援する。

○全教育活動の中で、子どもの人権が守られるとともに、人権を大切にする子どもを育てる。

○すべての児童が、学級や学年にとどまらず、他学年や育成学級（なかよし学級）の存在を認識し、仲間としての意識を高め、互いを尊重し、共に成長し合うように教育を推進する。

②人権教育の充実

○学校教育活動のすべてが人権教育であるという認識をたち、すべての活動を通して、児童の人権意識の高揚を図る。

○教職員が先頭にたち、人権が大切にされていると感じられる環境を推進する。

○児童の人権意識の高揚にむけて、人権にかかわるテーマを月ごとに設定し、定期的にさまざまな人権テーマで学ぶ機会を設定し、学習機会を大切にしていく。

○人権にかかわる学習について、指導事項や指導方法や教材などを保存し、次年度への指導の資料にするとともに、より効果的な取り組みとするための参考資料とし、学校の人権教育の推進につなげていく。

○教職員自らの人権意識を問い直す機会を設定し、自らを問い直し、人権に関わる学校環境をより良く高めていく。

○新たな人権問題や社会の実情に関わって、まず、教職員が積極的に学ぶ機会を大切にしていく。

③道徳教育の充実

○問題解決的な学習の流れを大切にし、授業の充実とともに、道徳的価値を深める。

○授業研修を通して、考え、議論する道徳の深化を図り、ことばの力の育成につなげる。

○中学校ブロックでの連携を深めるとともに、小中や小小の連携を通して、道徳教育の充実を図る。

○道徳教育推進教師を中心に全教育活動を通して、公共心や公徳心、生命を尊重する心、感謝する心等の道徳性を養う活動を充実させる。

○「道徳年間指導計画」をもとに、計画的に道徳の授業を行う。

④ 生徒指導の取り組みの充実

○「見逃しのない観察」「手遅れのない対応」「心の通った指導」を徹底し、問題行動・いじめ・不登校を未然に防ぐように努める。

○「川岡東スタンダード」の内容をしっかりと把握し、活用を通して温度差のない指導の徹底と内容の同一化に努める。

○子どもの背景にまで踏み込んだ児童理解を深め、受容・共感の姿勢で子どもとの関わりを深める。

○『学校いじめ防止等基本方針』のもと、学校体制として、いじめを許さない集団づくりを進め、問題の早期発見・早期対応に取り組む。

○児童虐待の防止のため、児童の生活背景の把握と細かな観察を励行する。

○不登校の実態や課題を把握し、学校復帰に向けて組織として積極的に取り組む。

○心の居場所づくり（担任、養護教諭、スクールカウンセラー、教職員の共感的な関わり）に努める。

○管理職との連携を密にし、各関係機関との連携を図るとともに、多角的に児童の実態をとらえ、柔軟に支援できるように努める。

⑤豊かな感性・規範意識の育成

○委員会活動やたてわり活動等の児童会活動を深化させ、自分や他人を思いやる心を育てる。

○異学年での（ペア学年や兄弟学年など）交流を行い、リーダーシップや他学年とのつながりを育む。
○読書活動を推進し、豊かな心を養う。
○様々な体験活動や人との関わりを通して規範意識や忍耐力を培う。
○スマホ・ケータイやインターネットに対する情報モラル教育の充実を図る。
○社会の一員としての自覚を持たせるとともに社会に貢献できる人となるため、人のために尽すことの喜びの実感などを通して、社会性を養う。
○公共心を養うための公共物を大切に扱う指導を徹底する。

３「健やかな体」の育成に向けて

心身の健康に関する意識を高め、生活習慣の確立とともに、継続した取り組みで体力の向上を図り、安全で安心な生活を推進する自己管理能力の育成

①運動・スポーツの実践

○全ての子ども達が運動やスポーツの楽しさと喜びを味わえる指導の充実をめざす。
・全校マラソン大会を一つの目標にした体力づくりの推進
・スポチャレなどを活用して、学級や学年全体での体力の向上に努める。
・部活動ガイドラインをもとにした部活動の活動時間を保障する。
・記録会や交流会などへの参加を目標に部活動の充実を図る。

②基本的生活習慣の確立

○生活アンケートの実施と現状の分析し、児童や家庭の実態を把握する。
○家庭との連携を強め、食事・運動・睡眠の調和の取れた生活実践をめざす。
○「早寝・早起き・朝ごはん」などの**基本的な生活習慣**の大切さについての理解を図る。
○スマホやタブレット、ゲームなどの視聴時間を確認するとともに、心身の健康等のかかわりについて適宜指導する。

③「食」に関する指導の推進

○栄養教諭と連携した食育指導の充実を図り、食の大切さと和食の文化についての理解を深める。
○「**食物アレルギー対応**委員会」による児童へのアレルギー対応を徹底する。
○食物アレルギー研修会を実施し、教職員の食物アレルギーに対する認識と対応の仕方を共通理解しておく。
○栄養指導の充実を図ることや日々の学級活動を通して、食に関わる人々と食物への感謝の心を育めるようにする。

④保健教育の充実

○定期的な保健指導を実施し、健康に関する意識を高める。
○自分の健康を適切に管理し改善していく力を育てる。

○薬物乱用・飲酒・喫煙等の害について正しい知識を身につけ、適切な行動ができる指導の充実を図る。
○人権教育としての性に関わる指導の充実を図ることで、自他の命や体を大切にする心情を育む教育を推進する。
○フッ化物洗口の実施や歯磨き指導などを通して、むし歯予防の実践をめざす。

⑤安全教育の充実

○安全ノートを活用した安全教育により、自分の命は自分で守ろうとする態度を育てる。
○ＰＴＡや地域の関係団体の協力のもと地域ぐるみの学校安全の実現をめざす。
○火災・地震・防犯における避難訓練を実施し、いざという時にそなえて、児童も教職員も行動の仕方や役割などを確認する。
○実地訓練を実施し、いざというときの教職員の認識を深める。
○定期的にシェイクアウト訓練を行い、突発的な対応に備える。

⑥防災教育・防災管理の充実

○危機管理マニュアルに基づく研修や訓練の実施を通して「主体的に行動する態度」を育てる。
○野外活動・社会見学・遠足等においては下見を十分に行い、安心・安全な活動に努める。

４．開かれた学校づくりにむけて

学校の取組を積極的に配信するとともに、学校と地域、学校と保護者の連携を高め、協働推進できる学校づくりをめざす。

○学校アンケートの実施と分析、そして速やかな公表

・児童、保護者、教職員、地域の４者比較を通して実態を明らかにする。
・アンケートの分析を通して、学校実態を発信し、保護者や地域と課題を共有化して連携を深める。

○ホームページや学校だよりの充実

・ホームページの積極的な更新を通して、日常の学校の様子を伝える機会を大切にする。
・学校だよりやホームページに学校の方針や取組を提示し、学校運営の理解と協力を求める。
・学校だよりを保護者や各種団体（および地域住民）への配布を積極的に行い、学校の取組を理解いただき、支援いただく。
・校門前に掲示板を設置し、学校の様子や行事についてお知らせし、地域の方にも学校の様子を知らせていく。

○学校運営協議会の充実

・年３回開催し、学校の実情など伝え、組織的な運営を図る。

・委員の方と学校との話し合いを通して、子どものよりよい成長を願った取組を模索する。
・必要に応じて臨時協議会を開催し、喫緊の課題について実情を提示し、ご意見をいただき、よりよい課題解決につなげる。

〇保幼小連携の推進

・地域の就学前施設との連携を図れるように取り組み方法やよりよい連携の仕方を模索する。
・就学前施設との交流を設定し、顔の見える連携を通して、スムーズな就学や、子どもや保護者のよりよい支援につなげる。
・就学前や就学後の児童の様子を交流する中で、家庭教育や地域教育の共有化を図る。

〇桂川中学ブロック小中連携、小小連携の充実

・４校（３小１中）のよさを生かした、９年間の連続性を考慮した学びと育ちの充実を図る。
・桂川中学ブロック校長会の定期的に開催し、児童や生徒の実態を共有化し、つながりを大切にした取り組みを実践する。
・小中連携の目指す子ども像を共有化し、義務教育の出口を見据えた教育実践を進めていく。
・４K 主任会（教務主任・研究主任・人権教育主任・生徒指導主任）を学期ごとに開催し、9 年間を見通して教育の推進を図る。
・桂川中学ブロックの教職員の研修会を行い、児童や生徒の様子を通して教職員の連携を図り、小中連携や小小連携の充実を図る。